

関西学院大学 研究成果報告

2020年 6月 5日

関西学院大学 学長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：宮原浩二郎

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	社会空間の感性的質に関する理論的・経験的研究
研究実施場所	国内（自宅、関学研究室その他）
研究期間	2019年 4月 1日 ～ 2020年 3月 31日（ 12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

所属・職・氏名： 社会学部教授 宮原浩二郎
 研究課題： 社会空間の感性的質に関する理論的・経験的研究
 研究期間： 2019年4月1日～2020年3月31日

社会美学（social aesthetics）は広い意味では社会科学と美学・感性論（aesthetics）の融合を図る学際研究分野の総称であり、近年では感性工学やメディア・アートなど工学・情報学なども含め多様な研究が展開されている。人文社会科学のなかでは、美学・感性論の研究対象を芸術作品や自然環境から広く日常生活や社会現象に拡張しようとする試みや、社会学的研究の方法に従来の「（量的・質的）データ」分析だけでなく社会現象の「感性的質」（aesthetic quality）を導入しようとする試みがなされてきた。本研究の中心課題は、後者の「社会現象の感性的・美的探究aesthetic inquiry into social phenomena」を可能にする理論枠組の構築や経験的研究の例示にある。その意味で、本研究はドイツの新現象学者 G. Bohmeの提唱する「雰囲気の美学」やアメリカの環境美学者A. Berleantが提唱する「芸術をこえた美学・感性論」を社会学に導入し、感性的・美的な社会学的研究の方法論およびその実践を目指すものである。

報告者は7年前に、美術家の藤阪新吾との共同研究にもとづいて、社会美学の研究成果を初めて公開している（宮原浩二郎・藤阪新吾『社会美学への招待－感性による社会探究』ミ

ネルヴァ書房、2012年）。そこでは社会美学を「人びとの交わりの場の感性的探究」あるいは「可感的な相互行為状況とアーティファクトから成る小社会の感性的味わいの研究」と定義し、日常的な「社会美」体験の報告から「テーブル」の感性的考察、鮎屋や商店街のフィールドワークと質感記述および社会学的考察を報告した。同時に、重要な先行研究・関連研究として石川三四郎の「社会美学としての無政府主義」、G. ジンメル「社会的芸術としての社交」、G. ベーメの「雰囲気美学」などの理論的・経験的考察を検討し、さらに、美的快楽と道徳性の関係性や感性的・美的なもの「主観的普遍性」、生理感覚・感性・観念（概念）の関係性をめぐる基礎的考察を行った。

今回の特別研究期間では、前著で提起した各論点をより丁寧に再考し、「社会美学」をテーマとする第二冊目の学術研究書を完成させることを目指して研究を進めた。具体的には、二度の沖縄・那覇滞在（沖縄市の基地周辺散策を含む）や国内の芸術祭（愛知トリエンナーレなど）参加における豊かなフィールド・ウォーク体験を含め、新現象学における「雰囲気」研究、「日常美学」をはじめとする現代感性論、小林秀雄（『本居宣長』）の「味識」論、近年の都市空間研究における「遊歩」（南博文）、「漂流」（M.G. エスコバル）、「現象学的一遂行的」方法（S. グラント）などを整理・吸収し、主観的でありながら客観性をあわせもつ「準客観的な社会的雰囲気」を扱う社会美学の理論的・経験的輪郭を前著よりも明確にすることができたと考えている。とくに、従来ともすると混同されがちだった文化論的な「表象」研究との方向性の違いが明らかになり、社会美学が社会空間の実在性（身体性）に照準していることが鮮明になってきたことの意義は大きい。

また、本研究期間においては、フィールド調査や論文執筆だけでなく、社会美学 social aesthetics に関する国内外の本格的な共同研究に向けた土台作りを精力的に行った。

報告者の英文論文” Exploring Social Aesthetics: Aesthetic Appreciation as a Method for Qualitative Sociology and Social Research” (International Journal of Japanese Sociology 23, 2014) などを介して、ここ数年、社会美学への関心は一定の世界的拡がりを見せている。報告者は、英語による論文交換システムである Academia.edu と ResearchGate などに既発表論文（英文）の一部や英文アブストラクトを可能なかぎり掲載し、後者内には国際的研究グループ Social Aesthetics ラボを立ち上げた。これを通じて、イギリスの政治哲学者 David Owen (University of Southampton)、アメリカの政治社会学者 Jason Kosnoski (University of Michigan-Flint)、ドイツの文化人類学者 Frank Heidemann (University of Munich)、イタリアの社会学者 (Antonio Strati)、アメリカの美学者 Arnold Berleant (University of Long Island) などと幅広く研究交流を進めることが可能になった。

日本国内においても、社会学者を中心とした社会美学の共同研究プロジェクトに向けた研究交流を活発化させた。その結果、2020年秋の日本社会学会において、「文化社会学の感性論的転回－社会美学の可能性と課題」と題するテーマセッションが開催されることになった。これは日本社会学会において「社会美学」 Social Aesthetics が正面から取り上げられる初めての機会となる。当日の報告者には文化社会学、理論社会学、組織社会学、社会運動論、臨床社会学、地域民俗研究、芸術社会学などに携わる多様な研究者が予定されている。彼らとの研究交流を通じて、今後の共同研究に向けた広汎な土台作りを行うことができたと考えている。

本研究期間中に発表した具体的成果としては、研究ノート「社会空間の感性的質について(4)－沖縄の「自治の感覚」」、「社会空間の感性的質について(5)－方法としての散歩」および事典解説「社交性と美学」（近刊）などがある。これらは現在刊行に向けて準備中の新たな著作『社会美学の展開』（仮題）の重要な構成部分となる。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

報告用紙②

◆ 研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。